人とつむぎ、織りなす日々のなかで

高齢期の発達

第2回　大人の仲間になりました

張 貞京

ちゃん　ちょんきょん／京都文教短期大学准教授。共著に『保育者のためのコミュニケーション・ワークブック』（ナカニシヤ出版）。

あざみで暮らすナツコさん

80歳になり、思い通りにできないことが増えてきた現状にとまどう、ナツコさんの話をしたいと思います。数年前に、散歩中に転び、脚を骨折しました。しばらく、車いすでの生活になりましたが、リハビリもがんばって、今は一人で歩いています。ただ、体のバランスを崩しやすく、一人で長時間歩いたり、段差を上り下りするのは、ケガにつながる可能性があります。そのため、2階にあった部屋から1階に部屋を変更することになりました。

これがナツコさんにとっては、大問題なのです。2階には、友だちのユミコさんと妹のように世話をしてきたサトコさんがいるからです。骨折するまでは、2階のリビングで、その人たちと編み物をしたり、手紙を書いたりしながら、いつでも一緒に時間を過ごしていましたが、それができにくくなるわけです。

ナツコさんが二人に会いに行きたいときは、2階のリビングまで職員が付き添うことにしました。しかし、ナツコさんは一人で動きたいのに、職員がさせてくれないと不満げに言います。ケガにつながる可能性を説明すれば、わかってくれるのですが、早く行きたい思いが強く、職員の付き添いを待つ時間が納得できません。老いていく自分の変化と、どう向き合っていくか、ナツコさんは毎日悩んでいます。

がんばりの人

ナツコさんが40代のころに、当時あざみの指導員であった石原繁野さんは次のように書いています。

「心も体も強い強い人になりたいことが彼女の願いです。彼女のむすび織をする指の動きには、だれもが目をうばわれます。工房の誇る日本一のむすび織名人です」

強い人になりたいと願っていたナツコさんは、10代後半で「あざみ寮」に入寮しますが、指先や身体全体の動きが弱々しい人だったようです。ひらがなの読み書きができ、家では刺繍をやっていたそうで、モノづくりに熱心にとりくむ姿は子どものときからあったのだろうと思います。不器用ながらも大変がんばる人で、入寮後にむすび織をはじめてから今まで、生涯のしごととしてとりくみ続けてきました。

ナツコさんのむすび織は色あざやかで、温もりが感じられる作品です。むすび織は、全身と指先に力を込めてやる作業ですが、不器用なナツコさんがどれだけの時間をかけてがんばってきたのかがわかります。できるようになる、上手になるためには、がんばる毎日の積み重ねが大切だとナツコさんは知っています。

石原さんが書いてくれた文章を読んで、ナツコさんは大変喜び、お礼を言っていたそうです。そして、自分の喜寿を祝う会では、「私のむすび織は日本一です」と自己紹介しています。ナツコさんがしごとに誇りをもっているのは、しごとの指導者からほめられたからではありますが、モノづくりのしごとに出会い、何十年もの間、がんばってきた自分、成長した自分を実感しているからだと思います。

80歳になった現在も、むすび織を続けています。体力に合わせて、しごとの時間は短くなっていますが、ナツコさんはもっとしごとがしたいそうです。なぜなら、ナツコさんのむすび織は「日本一」だからです。

人と支えあう

いつも、ナツコさんは、周りの友だちや職員をよく見て、手伝いを進んでやってくれていたそうです。誰に対してもやさしく接するナツコさんは、一緒に暮らす人たちが仲良くしてほしいと、よく言います。それは、人と支えあうことで励まされてきた暮らしの実感が根底にあるからだと思います。

ナツコさんが、特に大切に思っている人たちがいます。一人目は、入寮してから、ナツコさんがあこがれを抱いていたチサコさんです。年齢も近いチサコさんは、暮らしのなかで全員が順番に担当するさまざまな当番を決める役割をしていて、組み合わせを考えたり、均等に配分したりすることができるほど、全体を見て、理解する力がある人でしたが、歳を重ねるにつれ体を自由に動かすことが段々とむずかしくなっていきました。体を動かせないことへの苛立ちもあったと思いますが、周りの人に怒りをぶつけては、部屋にこもってしまうことが何度もありました。そのチサコさんに、ナツコさんは一生懸命話しかけ、気持ちをほぐそうとがんばっていました。そのがんばりのおかげでチサコさんも、周りの人たちとおだやかにかかわることが増えていきます。

ナツコさんがなぜ、怒りをぶつけるチサコさんに尽くしているのか、職員との話でナツコさんは、次のように答えています。チサコさんには、自分のことを「いつも相談している」のだそうです。ナツコさんがチサコさんのできなくなる苛立ちをどこまで理解していたかはわかりませんが、怒りを